

論文番号	7 (第10回研究会 2012.11.24 於青山学院大学)
タイトル	受容年齢層による動詞使用の差違—海外文学作品の日本語訳の場合—
著者名(所属)	湯浅千映子 (早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程)
連絡先Eメール	neoche125@gmail.com

論文内容

1. 研究の目的

一人の翻訳者がある文章を翻訳する際、翻訳者は「大人／子ども」といった読み手の年齢層に合わせ、その表現にちがいを出すことがある。本発表では、この点に着目し、海外の文学作品の翻訳を分析資料に、子ども向けの訳を読者対象の子どもが難なく理解できるのは、どんな言語的特徴によるのか、大人一般向けと子ども向けの訳し分けの実態を明らかにする。

分析に用いたのは、モンゴメリ作・村岡花子訳『赤毛のアン』、O・ヘンリ作・大久保康雄訳『最後のひと葉—オー＝ヘンリー傑作短編集—』、スティーヴンスン作・海保眞夫訳『ジーキル博士とハイド氏』、ハーン作・平井呈一訳『怪談』の計4作品(いずれも逐語訳)である。

2. 研究方法

訳し分けに伴う形態的特徴を概観した上で、「この子に告げる役目が、」(一般)／「この子に言う役が、」(子ども)といった一般向けと子ども向けで対応の見られる動詞による訳に限定し、以下の3つの観点について4種のデータから得られる数値を当てはめ、比較・分析し、さらに動詞の翻訳過程における行動描写の差について見ていった。

分析の観点	分析に用いたデータ資料	分析の判断基準
I 語種の変換	『教育基本語彙の基本的研究』	語種の情報
II 語の難易度	『教育基本語彙の基本的研究』	a 学習段階別配当 (小学校低学年、高学年、中学校)
	『日本語能力試験出題基準』	b 語彙表(4級語彙～1級語彙)
	『日本語の語彙特性』	c 語のなじみ度を指標化した単語親密度 (7段階)
III 語の意味の一致度	『分類語彙表』	分類番号5桁(+段落番号2桁)の重なり (7桁一致・5桁一致～一致なし)

3. 結果および考察

子ども向けの訳は、多くが「和語」で訳され(I)、一般向けの訳と比べ「難易度が低い」(II)。そして両者は「分類番号が一致し、同じ意味分野に属する」関係にある(III)。ただし、IIの難易度は、aの学習段階別配当の場合、難易度の変動のない例が易化の例と割合をほぼ二分するが、cの単語親密度から見ると、一般向けよりも子ども向けでよりなじみの薄い動詞で訳す例も存在した。

IIIの意味の一致度について、両者で分類番号5桁が一致し、意味が対応する訳し分けが過半数を占める一方、「それ(酒)を客にすすめるときの、」(一般)の「すすめる」を子ども向けで「さしだす」と訳すように、一般向けで事態の結果を静的にとらえ、解釈して示すのに対し、子ども向けでは、視覚的にイメージできる具体的な人間の動きとしてその過程を表すといった多様な訳し分けが見られた。

4. 結論

子ども向けに訳す際には、一般向けと意味の対応があつて、一般向けよりも難易度の低い動詞ばかりが必ずしも選ばれるわけではない。翻訳者は、読み手の子どもが物語の世界をより具体的に臨場感をもって受け止められるよう訳すことを優先し、一般向けの訳と意味が対応せず、より難易度の高い動詞を子ども向けの訳に選ぶ場合もあることがわかった。

参考文献

天野成昭・近藤公久編著／NTT コミュニケーション科学基礎研究所監修（2003）『日本語の語彙特性』三省堂

国際交流基金（2002）『日本語能力試験出題基準改訂版』凡人社

国立国語研究所編（2009）『教育基本語彙の基本的研究-増補改訂版-』明治書院

国立国語研究所編（2004）『分類語彙表-増補改訂版-』大日本出版

野村雅昭・柳瀬智子（1979）「児童読物の語彙構造」『計量国語学』12（2）計量国語学会

湯浅千映子（2010）「現代日本語の文章における読み手の年齢差に応じた表現の類型」未公開博士学位論文（学習院大学人文科学研究科）

湯浅千映子（2010）「小学生向け文章の書き分けの諸相：携帯電話の取扱説明書を資料に」『日本語／日本語教育研究1 2010』（日本語／日本語教育研究会）